

百年間にわたるわが国の翻訳文体変遷史

——ボッカッチョ『デカメロン』の場合——

谷 口 勇

わが国における翻訳スタイルの変遷を『デカメロン』の諸版を通して考察してみたい。筆者自身による文学作品の翻訳経験はJ・サラマーゴ（一九二二—）『修道院回想録』（一九九八）ぐらいだが、ボッカッチョについては『アマゾン族について』（上・下、一九八九—九〇）、「『テセウス物語』第一巻」をかつて発表したことがある。さて当のテーマについては二種の基礎的年表が公刊されている。国立国会図書館編（一九五九）によるものと、川戸道昭ほか編（二〇〇〇）によるものがそれぞれある。後者は後に『明治期翻訳文学総合年表』（川戸道昭ほか、二〇〇一）としていささか増補されて公刊されている。

ボッカチオ Boccaccio, Giovanni (1313—1375) イタリア

デカメローネ十日物語第1	梶耕吉	万里閣	昭23	Il decamerone
全訳 デカメロン (十日物語) 上・下	梅原北明	南欧芸術刊行会	大14	〃
全訳 デカメロン全2冊	梅原北明	朝香屋書店	[大15]	〃
十日物語 (デカメロン) 上・下	大沢貞蔵	天佑社	大12	〃
デカメロン 1, 2	柏熊達生	日本評論社	昭23 ~24	世界古典文庫 〃
デカメロン 上・下	柏熊達生	河出書房	昭28	世界文学全集古典篇6巻 〃
デカメロン 1—3	柏熊達生	新潮社	昭29 ~30	新潮文庫 〃
デカメロン	柏熊達生	河出書房	昭30	世界文学全集1巻 ボッカチヨ篇 〃
デカメロン 上・下	河原万吉	万有文庫刊行会	昭2 ~3	万有文庫 〃
デカメロン	北村喜八	近代社	大14	世界短篇小説大系古代篇ノ内 (〃)
デカメロン十日物語	木原直夫	文化書店	昭22	〃
デカメロン 十日物語	戸川秋骨	国民文庫刊行会	大5	〃
デカメロン 十日物語	戸川秋骨	国民文庫刊行会	大15	世界名作大綱2部 各篇篇目録5巻 〃
デカメロン	西野辰吉	新文社	昭22	〃
デカメロン	西野辰吉	青葉書店	昭26	〃
デカメロン 1・2	野上素一	岩波書店	昭23	岩波文庫 〃
デカメロン	森田草平	新潮社	昭5	世界文学全集2巻 〃
デカメロン 上・下	森田草平	新潮社	昭6	〃
完訳 デカメロン上	森田草平	新潮社	昭6	〃
デカメロン 1—3	森田草平	新潮社	昭8	新潮文庫 〃
デカメロン 1	森田草平	大泉書店	昭22	〃

(国立国会図書館, 1959, 536)

♠印は単行本

明治15年

6月 ♠欧州情譜／群芳綺話 大久保勘三郎訳 服部誠一校閲 宮川長次郎

[デカメロンDecameron、第1章「月下氷人媒介奇縁」
から第7章「奇夢符号痴蝶失耦」の7話収録]

明治18年

9月 指環ノ裁判 山王山下の木葉天狗訳 朝野新聞 (11~12日)

[デカメロンDecameron第1日第3話 (フィロメーナの話)]

明治19年

10月 ♠ボッカス翁十日物語／想夫恋 臥牛楼尚 (佐野尚) 訳 菊亭静校定 臨池書院⁽¹⁾

[デカメロンDecameron第5日第7話 (ラウレッタの話)]

明治20年

2月 ♠伊国情史／鴛鴦奇観^{おろおろきくわん} 近藤東之助 (菊亭静) 訳 高崎書房 (仏国カルトル訳)

2月 ♠泰西情話／密夫之奇獄 近藤東之助 (菊亭静) 訳 イーグル書店
(同、明治20年3月再版)

明治25年

4月 牧婦 宮崎湖処子訳 国民新聞 (26日~5月7日)

百年間にわたるわが国の翻訳文体変遷史

- [デカメロンDecameron第10日第10話 (ディオネーオの話)]
5月 十日物語之中／可憐鷹 宮崎湖処子訳 国民新聞 (20日～24日)
[デカメロンDecameron第5日第9話 (ディオネーオの話)]
- 明治27年
5月 冷熱 こうえふ訳 読売新聞 (27日～7月6日)
[デカメロンDecameron第8日第7話 (パンピネアの話)]
- 明治28年
7月 ^{よつ お}四の緒 十千萬 (尾崎紅葉) 訳 春陽堂
[デカメロンDecameron第5日第9話 鷹料理 (女王の ^{ディオネーオ}の話)、第7日第9話 三箇条 (パンフィロの話)]
- 明治29年
9月 手むけの草 平田禿木訳 世界の日本
[デカメロンDecameron第4日第5話 (フィロメーナの話)]
- 明治30年
4月 五彩雲 太田玉茗訳 文芸倶楽部
[デカメロンDecameron第5日第8話 観面 (フィロメーナの話)、第4日第5話 名ごりの花 (フィロメーナの話)、第9日第7話 夢のうつゝ (パンピネアの話)]
6月 めぐりあひ 太田玉茗訳 文芸倶楽部
[デカメロンDecameron第5日第2話 (エミリアの話)]
12月 銃の鋭 尾崎紅葉訳 太陽
- 明治31年
1月 手引の糸 尾崎紅葉訳 太陽
[デカメロンDecameron第3日第3話 (フィロメーナの話)]
- 明治32年
6月 まごゝろ 太田玉茗訳 文芸倶楽部
[デカメロンDecameron第4日第1話 (フィアンメッタの話)]
- 明治34年
6月 女の鑑 浅野馮虚訳 新文芸 (～8月)
[デカメロンDecameron第10日第10話 (ディオネーオの話)]
- 明治35年
7月 ^{よつ お}西洋花こよみ 長田秋濤訳 文禄堂書店
[デカメロンDecameron第10日第10話 奥様の試験 (ディオネーオの話)、第9日第6話 揺籠 (パンフィ

ロの話)、第7日第7話 おこゝろよし(フィロメ
ーナの話)、第8日第1話 二筋道(ネイフィレの
話)、第8日第8話(フィアンメッタの話)]

明治36年

6月 隻脚の鶴 片上天絃訳 読売新聞(21日)
[第6日第4話(ネイフィレの話)]

明治41年

5月 十日物語 高田梨雨訳 明星(～10月)
[デカメロンDecameron 第1日(はじまり)第1日第
1話(パンフィロの話)、第1日第2話(ネイフィ
レの話)、第1日第3話(フィロメーナの話)、第
1日第4話(ディオネーオの話・梗概)、第1日第
5話(フィアンメッタの話)、第1日第6話(エミ
リアの話)、第1日第7話(フィロストラートの話)、
第1日第8話(ラウレッタの話)、第1日第9話(エ
リザの話)、第1日第10話(女王の話)、第2日(は
じまり)、第2日第1話(ネイフィレの話)、第2
日第2話(フィロストラートの話・梗概)]

明治42年

8月 喜劇/三箇条 尾崎紅葉訳・栗嶋狭衣脚色 文芸倶楽部
[デカメロンDecameron第7日第9話 三箇条(パンフィロの話)]

明治43年

11月 ♠ポツカチヨオ/十日物語 水野和一訳 内外出版協会
[第1日第3話 三箇の指環(フィロメーナの話)、
第2日第4話 運命の戯れ(パンピネアの話)、第
4日第5話 髑髏の鉢(フィロメーナの話)、第4
日第7話 毒草(エミリアの話)、第5日第1話
掠奪(パンフィロの話)、第5日第2話 潮路のは
て(エミリアの話)、第7日第9話 鷹物語(女王
の話)、第6日第4話 鶴の脚(ネイフィレの話)、
第9日第7話 タラノが夢(パンピネアの話)、第
10日第10話 王の輿(ディオネーオの話)]

明治44年

5月 地獄に行ってきた詩人 文章世界
(川戸・中林・榎原編, 2000, 428-30)

これら年表のタイトルル全部を直接披見することは不可能であるので、間接的に知り得た情報をも動員して、ごく一部分ながら、具体的テキストから、本テーマに肉迫していくことにする。

森田草平（一八八一—一九四九）は自らも「翻訳の理論と実際」（一九三三）なる論文を書いていて、翻訳の黎明期において彼の記憶に残ったものとして、明治十五年六月刊の大久保勘三郎訳『欧州情緒 群芳綺話』からの一節を挙げている。⁽²⁾

(A)

「一日歸依スル所ノ寺院に詣リ歸途圖ラズモ同地ノ一美少年ニ邂逅シ頻リニ目送シテ思ヘラク女ト生ル、者願クハ斯、ル美男子ヲ所天トナサバ一生ノ快樂凡ソ幾何クゾヤト一瞥眷戀覺エズ惚然タリ是レヨリ思々念々彼方ニ馳セ獨リ胸ヲ焦ガシテ夜モ寢テ寢ラレズ偶マ枕ニ就ケハ少年ノ形容夢ニ入テ轉タ思ヒヲ増スノ媒介ト爲リ食モ爲メニ其味ヲ失フニ至レリ是レナン煩惱ノ大トモ謂フベク唯タ思フノミ然ルニ少年ハ斯、ル情實アリトハ夢想ニモ至ラザレバ毫モ婦人ヲ思フノ念ナシ婦人ハ眷戀ノ情ニ堪ヘズ寧ロ艶書ヲ送リテ眞情ヲ通ゼンカ將タ媒介ノ人ヲ得テ他ノ心情ヲ伺ハンカト種々ニ心慮ヲ苦シメケルガ此等ノ手段ハ皆ナ人耳ニ上ホリ易ウシテ甚ダ危険ナリ雙蝶ノ花間ニ戯ルヲ觀テハ之ヲ羨ミ鶯鶯ノ池面ニ浴スルヲ視テハ之ヲ妬ミ唯々辭々トシテ數日ヲ經過シケルガ竟ニ一策ヲ案出セリ其策ハ如何ニト云フニ彼ノ少年ハ品行端正ノ名アル一老僧ト交ハリ屢バ其寺ニ往來スルヲ聞テ……」

（大久保勘三郎、一八八二、三六）

『デカメロン』第三日第三話よりの自由創作訳。当時はイタリア語原文からの訳は考えられないから、おそらく英訳を下敷きにしたものである。手元にあるもので、もっとも古い版から引用すれば、該当箇所はこうなっている。

(B) ...Accordingly she fell in love with a gentleman, of suitable years, to that degree, that unless she

saw him every day, she could get no rest at night. But he, knowing nothing of the matter, had not the least regard to her; whilst she was so cautious that she would neither trust to letters nor messages for fear of danger; and knowing that he was much acquainted with a certain friar, one of a gross person, yet esteemed by all as a very religious man, she judged that he would be the fittest agent to go between her and her lover.

(*The Decameron or Ten Day's Entertainment of Boccaccio, 1922, 143*)

河島英昭 「イタリア文学」、二〇〇〇、六九／「ボッカッチョ」、一九九七、一二八)によれば、英語版からの重訳を試みた者に、戸川秋骨(一九二七)と森田草平(一九三二)がいるとのことだが、前者では、該当箇所は省略されておられ、後者も森田訳(一九三〇)ではやはり省かれている⁽³⁾。より初期の英語版からの重訳者には、梅原北明(一九〇一―一九四六)がいた。

(C) ……毎日晝のうちに一日たりとも其の人を見ねば、夜になつて眠れないと云ふ始末なんです。併しその御本尊たる青年貴族にあつては、もとより其なあられもないのぼせ方であるとは氣付きません。ですから婦人に對するにも何等の頓着や注意も與へません。

婦人は日夜此の青年を如何にしてかき口説けばよいか? 専心そのみを考へつづけて居ます。何しろ身

は人妻で御座いますから發覺したならと云ふ恐怖があります。ですから輕はづみにもラヴレターを送つたり、使を遣つたりする等の迂濶な眞似は無論出來ません。用心に用心を重ねて苦しみ悶えあぐんだ末、漸やく考へついたのは、その青年紳士と或る僧侶とが親友の間柄であると云ふ事に氣付いて、彼女は其の僧侶を巧みに利用しやうとした思ひついたのであります。

(梅原北明、一九二五、上三四一)

傍点は梅原による。原文にはない疑問文(描出話法)を活用したり、適当にアクセントを付して、読者を引き込んでおり、今日でも古さを感じさせない語り体の訳文と言える。(A)ほどではないが、訳者の自由が存分に發揮されている。森田(一九三三、二二)は、早稲田大学は文学者の養成所と思われていたため、新潮社は主に早稲田関係者に翻訳を頼んだというが、実は梅原は早大英文科を中退し、性文献の翻訳では「近代最高の貢献者」(日本近代文学館編、一九七七)とされる人物である。梅原訳本では、イタリア学者下位春吉も序文「ボ翁の五百五十年祭祝辞」を寄せているように、一八七五年ロンドン発行英訳本を底本としつつも、部分的には、下位によるイタリア語からの直接訳も活用されたようだ。

さて、森田草平訳(一九三一)だが、彼自ら引用しているのは次の個所である。

(D) 「して又、事實夫人は或中年の瀟洒たる貴族にすつかり惚れ込んで、一日その人の姿を見なからうものなら、その夜は眠られないといふ程になりました。が、相手の貴族はそんな事とは一向知らないで、夫人のことで一向氣に掛けてるませんでした。ですから、夫人の方でも非常に用心して、女の使者を立てたり、胸の想

ひを籠めた戀文を書いたりして、空恐ろしい危険に身を晒すやうなことをしようとは思ひませんでした。そして、かういふことに氣が附いたのでね。その紳士の足繁く往來してゐる一人の坊さんがあつて、その坊さんは、極めて愚昧で教養もありませんでしたが、五戒の道に精進してゐると云ふので、一般にはお上人様と崇められてゐたので御座います……」

(森田訳、一九三二、上二四二)

これは独語版からの重訳らしいので、手元にある A. Wesselski (Leipzig 一九〇九、初版) の独語訳 (詩は F. Daubler 訳) (fourier 一九八〇、三〇三⁽⁴⁾) を見るよ、いいよね。

(E) ...und so verliebte sie sich in einen gar wackeren Edelmann mittlern Alters, und das so, daß sie des Nachts vor Gram nicht schlafen konnte, wenn sie ihn am Tage nicht gesehen hatte. Der Edelmann aber kümmerte sich nicht darum, weil er nichts davon ahnte, und sie, die sehr vorsichtig war, getraute sich aus Furcht vor den möglichen Gefahren nicht, es ihn durch eine Botin oder einen Brief wissen zu lassen. Als sie aber bemerkt hatte, daß er viel mit einem Klosterbruder verkehrte, der seines frommen Lebenswandels halber trotz seiner Dummheit und Ungeschlachtheit allgemein in dem Rufe eines trefflichen Mönches stand, ...

たしかに、この独語と(D)の森田訳はぴたり符合する。なかほどの「かういふことに氣が附いたのでね。」という

訳文は、(C)についてのコメントでも触れたが、読者を引き込もうとする技法がうまく受け継がれているように思われる。

さて、『デカメロン』のイタリア語原文からの完全訳が出始めたのはやっと第二次大戦後のことである。戦前は発売禁止や検閲に引っかかって「低俗な文学趣味と……奇妙に厳格な検閲との、いわば挟み撃ち」(河島、一九九七、一二八)で惨憺たる出版の歴史を経たのである。もっとも、Arturo Barone (1989) のときは、ボッカッチョを“Pornography (Erotic Literature)”の世界最初に位置づけているのだが、反面、以下のように正当にも評価もしている。

- In the early fourteenth century Giovanni BOCCACCIO (born in Paris, the illegitimate son of an Italian father and a French mother) who followed closely on Dante and Petrarca, wrote the Decameron, which is a masterpiece of earthy, bawdy, funny prose, written in a quiet, understated manner.

(A. Barone, 1989, 38)

戦後早く現われた梶耕吉訳 (1948) を見てみよう。該当箇所は次のとおり。

- (F) ……そして或る中年の立派な男に夢中になって、若し日中に彼の姿を一目でも見ないやうなことがあれば、

その夜は安心して過せないほどとなりました。けれどもその紳士は、そのやうなことは知りませんので、彼女に少しも氣を配るやうなことはいたしません。ところで、夫人はきはめて慎重な性たちでしたので、將來の危険をおそれて敢て使をやったり、手紙を出したりして思ひを告げるやうなことはいたしませんでした。

さて、この紳士が、或る僧侶と親交のあることを知った彼女は、この僧侶を自分と紳士の仲の絶好な取持役に利用しようとしました。この僧侶は無智な鈍物でしたが、甚だ敬虔な生活を送つてゐましたので、世間からは極めて立派な僧侶として噂されてゐました。

(梶耕吉訳、一九四八、第一卷 二七八—九)

Vittore Branca の定本 *Decameron* (1965) では、⁽⁵⁾原文は次のとおりである。

- (5) ...E innamorossi d'uno assai valoroso uomo e di mezza età, tanto che qual di nol vedeva non poteva la seguente notte senza noia passare; ma il valente uomo, di ciò non accorgendosi, niente ne curava, ed ella, che molto cauta era, né per ambasciata di femina né per lettera ardiva di fargliiele sentire, temendo de'pericoli possibili ad avvenire.

Ed essendosi accorta che costui usava molto con un religioso, il quale, quantunque fosse tondo e grosso uomo, nondimeno, per ciò che di santissima vita era, quasi da tutti avea di valentissimo frate fama, estimò costui dovere essere ottimo mezzano tra lei e il suo amante.

(*Decameron*, 1965, 337—8)

パラグラフの切り方も原文どおりに、丁寧に訳出されている。梶訳は第一巻で終わった(らしい)のが惜しまれる。真の意味で初めて完訳をやり遂げたのは同じく一九四八年から刊行し始めた柏熊達生(一九〇七—一九五六)である。この柏熊訳は数回にわたって各所から重版されたが、ここではノーベル書房版(一九八一)から、該当箇所を引用しておく。(彼以後、注目すべき訳は出てないし、本稿もこの訳をもって一応終えざるを得ないのである。)

(H) ……そして非常に立派な身分の、ある中年の男に思いをよせましたが、ひどい熱の入れ方で、昼の間に彼を見ないと、その夜は安心して眠れないという始末でございました。しかし、その身分のある男は、そんなことに気がつかず彼女に取り合ってくれません。彼女は、非常に用心深かったので、他日おこるかも知れない危険をおそれて、女を使者に立てたり、恋文を送ったり打ち明けたりする勇気がありませんでした。そこで、彼女は、その男が非常に親しくしている修道士を知っており、この修道士こそ自分の恋人との間のうってつけの取り持ち役にちがいないと考えました。この修道士は、単純で血のめぐりのよくないほうでしたが、それにもかかわらず非常に信仰のあつい生活を送っておりまして、ほとんどだれからも、善知識としての名声をうけていました。

(柏熊達生訳、一九八一、一二六五)

以上が百年間(一八八二—一九八一)における『デカメロン』訳文の変遷史の概要である。⁽⁶⁾河島(一九九七、一二八)は戦後の訳は「語学上の正確さにおいては進歩を見たものの、文学性においてはむしろ後退した観がないわけ

はない」と指摘しているが、確かに、訳文としての面白味という点では、(C)の梅原訳で頂点に達した感がある。(D)の森田訳もドイツ語重訳ながら捨てがたい。森田は東大英文科の出身ながら、ドーデ『サッフォー』（青年学報社、一九一四）、ゲーテ『ウィルヘルム・マイスター』（国民文庫刊行会、上・下 一九二六）も訳出している。彼は「翻訳者の資格としては、まず原作を完全に正確に日本語に移す良心と能力、つまり学者的要素と、次には訳語としての日本語を自由に駆使する能力と修養、つまり文学的要素とが必要である」（森田、一九三三、二二）との結論を導き出しているが、まさに至言と言えようし、(D)はその実証例ともなっているのである。(H)に至って、正確さは確保されたが、楽しい読み物としての味はかき消されてしまった。

〔付記〕

翻訳論はU・エコも最近英語版 (Eco, 二〇〇一) と増補改訂イタリア語版 (Eco, 二〇〇三) を相次いで刊行するなど、著しい関心を寄せている。筆者も先年『エコの翻訳論』（一九九九）を紹介したことがある。中国でも、たとえば、劉宓慶（一九九二）が本格的な研究書を出している。その他、筆者が特に注目しているものに、Susan Bassnett & Andre Lefevere (1990, 1995) / W. Radice & B. Reynolds (1987), Salvadora Peña / Ma José Hernández Guerrero (1994), Cukovskij Kornej (2003) 等がある。

筆者の今後の課題としては、ホメロスを中心とした「トロイア戦争」文献のわが国への流入をも論じたいと考えている。これまた『明治期翻訳文学総合年表』でも相当数が列举されているが、これに洩れている重要文献を筆者は発見したからである。

注

- (1) 明治二五年五月には、「泰西情話 想夫恋^{そうふれん}」竹葉散人著 鐘美堂「シェイクスピア劇数篇の翻案」が出ているが、この題名はこれからヒントを得たのではないかと思われる。
- (2) 大久保勘三郎についてのデータは未詳。
- (3) ちなみに、河島自身の抄訳『デカメロン』（一九八九）でもこの個所は省かれていて、彼自身の訳文を見ることは残念ながらできない。
- (4) *Altdcutches Dekamerone* (hrs. u. übert. von Wolfgang Spiewok, Berlin, 1984) は新しい観点からテーマ別に編まれているものである。
- (5) 筆者が大学院演習のため『デカメロン』を自習したときに体験したことは、ボッカッチョの語彙の説明はクルスカ・アカデミーの辞典（一七四〇）がもっとも適確だという点である。これの参照を怠ると、教員でも誤訳しかねないのだ。
- (6) ちなみに、錢鴻喜ほかによる現代中国語訳の該当個所はこうなっている。
 后来她果然爱上了一位年轻力壮、精明强干的男子，以至于哪天没有看见他，晚上就烦躁得睡不着觉。
 可惜，这位男子没有发现这一点，更没有注意到她。她呢，又十分谨慎，既不敢叫贴身女仆告诉他，也不敢写信，唯恐出什么差错，招致危险。后来，她发现那位男子跟一位神父来往十分密切，这神父虽然长得肥胖粗大，一脸蠢相，却倒也极为虔诚，很受大家的好评，她觉得可以利用他给她和她的情人牵线搭桥。

〔十日談〕訳林出版社、南京、二〇三頁

参考文献（ABC順）

- A. Barone (1989):
Italians First! Paul Norbury Publications, Kent.
- S. Bassnett & A. Lefevere ed. (1990, 1995):
Translation, History & Culture, Cassell, London/New York.

V. Branca ed. (1965) :

Giovanni Boccaccio, *Decameron*, Felice Le Monnier, Firenze.

クルスカ・アカデミー (一七四〇) :

Vocabolario degli Accademici della Crusca, Venezia.

Cukovskij Kornej (2003) :

La Traduzione: una grande arte, Libreria Editrice Cafoscarina, Venezia.

U. Eco (1999) :

谷口伊兵衛編訳『エコの翻訳論』而立書房。

U. Eco (2001) :

Experiences in Translation, Univ. of Toronto Pr. Incorp., Toronto/Buffalo/London.

U. Eco (2003) :

Dire quasi la stessa cosa. Esperienze di traduzione, Bompiani, Milano.

英訳 *Decameron* (1922) :

The Decameron or Ten Day's Entertainment of Boccaccio, Chatto & Windus, London.

梶耕吉訳 (一九四八) :

『十日物語』第一卷 萬里閣。

柏熊達生訳 (一九八一) :

『デカメロン』I ノーベル書房。

河島英昭ほか訳 (一九八九) :

「世界文学全集」4 「ボッカッチョ／ペトラルカ／ミケランジェロ」 講談社。

河島英昭 (一九九七) :

『集英社 世界文学大事典』4 「ボッカッチョ」 集英社。

- 河島英昭 (二〇〇〇) :
原卓也ほか編 『翻訳百年―外国文学と日本の近代』 「イタリア文学」 大修館書店。
川戸道昭ほか (二〇〇〇) :
『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』 50 「イタリア文学集」 ナダ出版センター。
川戸道昭ほか (二〇〇一) :
『明治期翻訳文学総合年表』 ナダ出版センター。
国立国会図書館編 (一九五九) :
『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』 風間書房。
劉宓慶 (一九九二) :
『当代翻訳理論』 書林出版 中華民國。
森田草平訳 (一九三〇) :
『世界文学全集(2) デカメロン』 新潮社。
森田草平訳 (一九三二) :
『完訳 ボッカチオ・デカメロン』 上 新潮社。
森田草平 (一九三三) :
『英語英文学講座(第6回配本)』 「翻訳の理論と実際」 新英米文学社／日本図書株式会社。
日本近代文学館編 (一九七七) :
『日本近代文学大事典』 講談社。
S. Peña / M^a J. Hernández Guerrero (1994) :
Traductología, Univ. de Málaga, Málaga.
W. Radice & B. Reynolds (ed.) (1987) :
The Translator's Art. Essays in honour of Betty Radice, Penguin Books, Middlesex.

J・サラマーゴ（一九九八）…

谷口伊兵衛／J・ピアッツァ訳 『修道院回想録』 而立書房。

谷口勇訳（一九八九、一九九〇）…

「ボッカッチョ『アマゾン族について』訳解」（上）「人文科学研究」第25巻第2号（下）「人間科学」創刊号。

戸川秋骨訳（一九二七）…

『十日物語』 国民文庫刊行会。

梅原北明訳（一九二八）…

『デカメロン』上・下二巻 成光館出版部。

A. Wesselski (1909, 1980) :

Giovanni di Boccaccio, *Das Dekameron*, Insel Verlag, Leipzig; fourier.

（二〇〇三年六月十一日受理、七月九日採択）